

## スペイン革命の実存的側面とその教訓

（一）

どんなにインチキな革命でも、その革命へ労働者や農民の尻をヒッパタイて持って行き、彼らの名において権力をにぎれば、万事はうまく完了すると考えて行動している奴がうじゃうじゃいる。こういう権力の餓鬼が権力をにぎると、まず第一に、無暗やたらに法律の山をデッチ上げて、民衆の自由を抑圧し、その実際生活上における創意をむしり取ってしまうのが定跡である。フランス革命政府もロシヤ革命政府も、このデンをおしみなくやってのけた。なぜ、そうなったか、それは、彼らの認識の欠陥の中にあるよりも、むしろ、生の価値意識の自覚不足、又は体験不足に起因していると思う。具体的にいえば、それは、彼らが「併置され一束に引くくられた集合体」に対しては、多くの体験と自覚とを有しているが、「緊密に結合した個々人が、互いに関係し合う協同体」に対しては、赤ん坊よりも無知で無経

験であったからである。

彼らが階級という冠りを、この「集合体」にかぶせた時から、彼らの頭に浮んでいた階級とは、同じ服装、同じ顔付き、同じ銃を持って同一方向へ進む歩兵の集団と同じものであって、かつて、バクーニンが絶讃し、又、晩年マルクスがヴィラ・ザスリッチへの手紙の返事の中で「社会組織の強力な形態であり、資本主義的生産段階を通過せずに直接、高度の社会形態に達することができる」とまで高く評価した、ロシアの「ミール制度」が持っていたような協同体とは、全く違ったものであった。

われわれがスペイン革命を最重要視するのは、この全く疎外されていた協同体斗争と、階級の冠りをかぶせられた集合体の斗争とが、スペインにおいても最も完璧に統一されたためである。

この統一は勿論、量から質への転換によって生じたものではない。それは質的なもの―集合体―マルクスは個人を抽象とし、階級の冠りをかぶった集合体を具体的なものとして質的属性を与えたが、われわれはマルクスとは違って、現代の集団主義的お祭りさわぎの中では、仲々納得されないであろうが、集合体の本性を孤独であると断定する―が、他の全く異質的なもの、即ち協同体へ飛躍を通じて、大地が水を吸い込むように吸収されると云う形で行われたからであると考える。哲学好きな奴が、この中に唯物弁証法の止揚を通じての連続ではなく、キエルケゴールの質的弁証法の飛躍を通じての連続を見ることは勝手であるが、われ

われはこの具体的な姿を、斗争する協同体の中に求める時、一切の階級的序列を廃除したドウルチー兵団の果敢な行動の中に、又、経済体制の面においてはスペイン農村のコレクティブ運動の中に、その最も活発な典型を見出す。

それ故に、黒田豊が「社会観の探求」の中で、認識の党派性や階級性を論じて、古臭い両刃の剣をふり廻しているのは片腹痛い次第である。

## (二)

スペイン革命では、この飛躍を通じてなされる吸収作用は最も大規模に、最も急角度に行われたのであった。当時、スペインにあった二つの政府―バルセロナ政府とカタロニア政府―の一切の機能は、完全に都市労働者のサンジカと農村コレクティブスに吸収されてしまった。彼らは何んら政府のおせっかいなしで生産と分配とを完全に管理した。それは近代史上未曾有の出来事であった。そして、諸君は同志久保の簡潔な、又、極めて要を得たパンフ「スペイン革命」―CNTを中心にして、―の中で、スペインの婦人をも含めて全労働者諸君が、おそいかかる諸困難に直面しながらも、なお社会組織の力と創造的な創意の能力を、どのように示したかの幾多の具体的な実例を読み探ることができらるだろう。

かくて、われわれは日本においてすら、この素晴らしいスペイン革命の結果について一つの重要な記録を持つことになったが、如何にして、この急激な吸収作用が行われたかについては、外国でもベルナンが「スペインの迷路」の中で、少しくその経過に触れているのみで、誰もまだそれに及んでいる者はいない。

幸いにも、われわれは先ごろ関西地協の同志諸君の肝入りで、スペイン農村コレクティブス運動に身をもって挺進した同志ガルシャ君から、直接この点に関して、極めて重要な二、三のノートを探ることができた。われわれが文書の形で出した質問要項と彼の答は以下のようなものであった。

質「スペイン農村コレクティブスと呼ばれているものは、正確には、農村コミュニティと解して良いか」答「よろしい」、質「旧体制からコレクティブスへまさに移ろうとする時の、あなた方の感情の推移について少し説明してほしい」答「意識的な者は勿論のこと、われわれの周囲にいた下層農民諸君は、資本主義社会体制の基礎であった倫理の矛盾に悩み抜いていた結果、飛びつく思いでコレクティブスへ突入して行ったのでした」。

続いて、われわれは最も進歩的な社会学者インフェルトが「協同体の社会学的研究」の中で、法律にかわって、協同体をつらぬいて働く宗教感情の役割と、その重視の問題に関連して、農村コレクティブスの宗教性について尋ねたところ、彼は「農村コレクティブスには形式としての宗教性は少しもなかったが、強い宗教的感情を感じた」と簡単に答えを書いた。

重ねて、われわれは、「前述の倫理的なものから宗教的なものへ突入して行く際、アナキズムは触媒としての役目を果たしたのであるか」と尋ねると、暫く考えに沈んでいた彼は強くかぶりを振りながら「私はそうは思わない」と書いて感嘆詞を後尾に筆太に記入した。

われわれはこの問題を、もっと追求したかったが、他にも答えて貰わねばならぬ多くの問題を持っていたし、就中、英語の力の不足のために、こんな処で打ち切らねばならないのが残念至極であった。

### (三)

一方、ジェランド・ベルナンは前述の書物の中で、この問題をどのように述べているだろうか。彼はスペインのアナキズム運動の急速な成長の原因の中に、特に、農民諸君の烈しい宗教的感情のあったことをあげている。これは勿論、教会に服従したり、坊主共を信じたりすることを意味しない。事実、スペインにおけるほど、アナキスト達が教会の腐敗と坊主の墮落を突くために、無数のパンフや本をばら撒いた処はなかったのだから。にも拘らず、彼がスペインにおけるアナキズムを「倫理的条件の中で判断しないで、政治的条件の中で判断するのは間違いだ」と書いた事は正しいし、なお、この倫理的な領域から宗教的領域への

農民諸君の感情の推移を目的論的に捕えている点も正しいが、ベルナンが間違ったのは、ガルシヤ君が強く否定したのに反して、スペインにおけるアナキズムを、こちら側からあちら側へ飛躍する時、うっちゃられてしまふ一棒高飛びの棒―即ち、単なる媒介だと考えた点にあるようである。

果して、そうであろうか。即ち、アナキズムは、倫理的な又、宗教的な相互扶助精神で打ちつらぬかれた協同体へ飛び移り、それを世界史的普遍で支えるための、単なる跳ね板に過ぎないだろうか。これは少なくとも三つの重要問題を提起している。しかし、ここではアナキズム協同体の持つ異質性と、原始協同体の起源にある同質性―古代ギリシヤ人にとっては、パンの四肢は山羊のそれと、レダは白鳥と、ダフネは月桂樹とまで、極めて単純に快活に神話の中で溶け合い、一層、思索的なエジプト人にとって（近代的見解からすれば、単に怪物に似た迷信的偶像に過ぎないが）、スフィンクスなどに表象される同質性―との相違の問題や、又、ニーチェが自己と他の差異に誇りを感じ、ツアラストラを優越なるものとして世界的普遍で支えたように、アナキズム協同体を支えることが欺偽であるかないか、の問題には触れないで、最後のアナキズムは単なる媒介に過ぎなかったか、どうかの問題にのみ関心して、さを急ぐことにしたい。

アナキズムには実存的な側面が多分にあるので、われわれがキエルケゴオルをちょっと、登場させても別に大きな異議はないであろう。

彼は倫理の実存から、宗教的実存への飛躍に当って、フモール（諧謔、又はおかしみ）を媒介としてではなく、その間へ挿入している。媒介としてではなくというのは、フモールはすでに、倫理の実存の中にある、その有限性を諧謔的に見ることに於いて、活発に働いている姿だからである。即ち、実際、まじめな者であればあるほど、厳密に倫理的に生きることは不可能であり、その努力に「おかしみ」を感ぜざるを得ないということは、フモールは、すでに倫理の実存の中に在る宗教的実存の仮りの姿である、と彼は考えているのである。

もし、「物」、又は「事」を、客観的立場から述べなければ真理は無い、と考えている人があるとすれば、われわれはそういう人達に、これを有限概念と無限概念の問題に置き換えて見ることをすすめたい。諸君は、すでに、初等代数学や初等英語の学習に当って、置き換えや書き換えの問題には習熟しているであろうから。

#### (四)

スペインにおけるアナキズムは、丁度、これと同じように作用したのではないだろうか。例えば、一九三七年七月革命が勃発するまで、スペイン、アナキズムは、資本主義利益社会の基盤であった倫理の有限性のまっただ中で、最も果敢な闘いを続けて来た。そして全く非

連続的に決意の撰択によって、飛躍的に協同体的な無限性に到達したのであった。

繰り返すようではあるが、同志諸君の中には、かかる主体的な、或は実存的な見解に反対して（マラテスタの異論があるにも拘らず）、クロポトキンが古い唯物論的な客観主義の立場から、「相互扶助」的感情を有限的な倫理的範疇のもの、と規定したことを楯にとったり、或いは「自由コンミュニ」が自治権を持った中世のヨーロッパにおいて、ドイツ、フランス、及び、イタリヤのコンミュニが都市の中で栄え、職人や商人をその構成員としているのに反して、農民、牧者、海岸地方では多くの漁民から成っておるスペインでは、自治的感情が非常に強く、イニシャティブに富み、非常に個人主義的であると同時に、その後、国家の成長によって止めをさされるに至った処の「相互扶助」的な本能が、ヨーロッパの如何なる他の国々よりも発達をしていたこと、―それ故にヨーロッパの他の国々が、そのコンミュニの自由と特権とを十三世紀の中頃に、漸次、国家に吸収されていったのに反して、スペインでは国家の権力と敢然と対立して、長く活発に、それぞれの民衆の中に生き続けたというような歴史主義の立場から、多くの批難が出るであろう。

われわれは、前者の批難に対しては、以下のように答えたい。即ち、クロの一九世紀的な機械的唯物論には、勿論、多くの難点があったが、同時に彼は素晴らしい理想主義者であった。それ故に、もし、彼が最後の著書「倫理学」をとぎされたモスクワ郊外のようなソ連的環境ではなく、自由に思索し、自由に文献を渉猟しうる何処か他の場所で、書き始めていた

ならば、おそらく、彼の学説は有限性から解放され、別種の新しい発展を示していたのではなからうかという問題を、クロに親しく接した人々の記録―彼のふと洩らした言葉や、彼自身も気づかずに行った行為の集成―の中から再発見するまで、待たねばならぬ。

後者は歴史的認識と価値意識の問題である。それは相互関連的であるが、最初は認識の次元に発したのではなく、生それ自体の価値の問題に発し、続いて歴史家の認識を左右する重要な要素となるものであるから、われわれの記述が歴史主義者達から、多くの批難を受ける理由を本質的にはみとめ難い。

(未完)

ここまで書いていた当時、筆者は不慮の自動車事故によって意識を一時失って、有限の世界から、一寸無限の境へ小旅行しました。そこには何もなかったので、勿論、神は不在でしたが、一切の創造が何処で始まるのかという問題が、深なさけの女のように筆者をつかまえて離さないのて参っています。筆者が警戒しなければならぬのは、遺手に過ぎない西田哲学でしょう。